

## かきを食べる竜りゅう

むかし、大府村の桃山ももやまの東の峯畑みねはたには、たくさんのかきかきの木が植えてありました。秋になると、かきの木には、かきの実がすずなりになりました。村の人々は、毎年、かきをたらふく食べることができました。

ところが、ある年のことです。この年初めてかきを取り入れようと、畑に出た六兵衛ろくべゑさんたちは、びつくりしました。なんと、きのうまでは、あれほど多くあつた、色づいていたかきが一つもなくなつて、青い実ばかり残っているではありませんか。

「これは、いったいどうしたことかのう。」

「うん。だれかが、夜のうちに来て、かきの実を取つていったにちがいない。」

「みんなで、どろぼうをつかまえてやろう。」

と、六兵衛さんたちは、相談をし、每晚交代でかきかきの木を見回ることになりました。

何日かたつて、青かつたかきの実が、赤く色づきました。

「今夜あたり、かきどろぼうが出そうだなあ。」

と、この夜の見回りの当番だった  
六兵衛さんたちは、いいました。

真夜中になりました。見回りを  
していた六兵衛さんたちは、暗い  
中、向こうの方のかきの木で、何  
者かがかきの実を食べているのを  
見つけました。

「よおし、やっつけてやる。」

六兵衛さんたちは、棒切れやくわ  
などを手にして、そつと足音をた  
てないように近寄っていきました。

「こらああ。」

大声を出して、かきどろぼうにお  
そいかりました。

するとどうでしょう。かきどろ

ぼうは、目をぎらぎら光らせ、真



つ赤な大きな口を開けて、六兵衛さんたちの方へ向かってくるではありませんか。するどいきばのような歯で、今にも六兵衛さんたちをかみ殺そうとしているようでした。「うわあ。助けてくれええ。」

六兵衛さんたちは、あまりのおそろしさに逃げ出そうとしましたが、みんなこしがぬけて動くことができません。そのうち、全員が気を失ってしまいました。

朝になつて、六兵衛さんたちが気づいたときには、かきどろぼうの姿も色づいたかきの実もありませんでした。

「あれは、きつと桃山の竜神さまじゃ。」  
と、だれともなくいいました。

それから後、村の人たちは竜神さんを祭り、毎年、秋になると、一番なりのかきをお供えするようにしました。

大府地区に伝わる話です。

これも前の話と同様に「桃山の竜神さん」にかかわる話です。竜神さんは、水や実りをもたらすと信じられている一方で、人間に害を与えるという一面もありました。